

男子名を古日といふに恋ふる歌三首

九〇四番

世の人の尊び願ふ 七種の宝も我は 何せむに 我が中の生まれ出でたる 白玉の 我が子古日は 明星の 明くる朝は 起きたへの 床の辺去らず 立てれども 居れども ともに戯れ 夕星の 夕になれば いざ寝よと 手を携はり 父母も うへはなさかり さきくさの中を寝むと 愛しく しが語らへば いつしかも 人となり出でて 悪しけくも 良けくも見むと 大舟の 思ひ頼むに 思はぬに 横しま風の にふふかに 覆ひ来ぬれば せむすべの たどきを知らに 白たへの たすきを掛け まそ鏡 手に取り持ちて 天つ神 仰ぎ乞ひ禱み 国つ神 伏してぬかつき かからずも かかりも 神のまにまにと 立ちあざり 我乞ひ禱めど しましくも 良けくはなしに やくやくに かたちくづほり 朝な朝な 言ふこと止み たまきはる 命絶えぬれ 立ち躍り 足すり叫び 伏し仰ぎ 胸打ち嘆き 手に持てる 我が子飛ばしつ 世の中の道

反歌

九〇五番

若ければ 道行き知らじ 賂はせむ したへの使ひ 負ひて通らせ

九〇六番

布施置きて 我は乞ひ禱む あざむかず 直に率行きて 天路知らしめ